

令和6年度 学力向上指導改善プラン

すずかけ台小学校長 山口 茂樹

学校教育目標		夢に向かって共に歩むすずかけっ子の育成		4月			2～3月			
推進主体		学力向上委員会(管理職と主幹教諭・研究推進担当・生徒指導担当を中心)を設置して実施。		学力向上に向けての重点的な目標		成果となる目標	具体的な行動目標	年度末評価		
学力に関する前年度の状況・経年の課題等				(指標となる数値等)			(成果目標達成のための具体的な手立て等)		(今年度の成果と来年度に向けた課題等)	評価
学力 の 状 況	全国学力・学習 状況調査結果 の状況 (国語、 算数・数学に 関する質 問調査の 結果も 含む)	国語	○正答率全国平均を5ポイント上回った。国語力は概ね定着している。 ○記述式問題ではいずれも正答率が全国平均を上回っている。目的や条件に応じた文を書く力が定着している。 ○「話し手と考えを比較しながら、自分の考えをまとめる問題」で全国平均を8ポイント上回った。この結果から「自分の考えと比べながら他者の発言を聞く力」を日々の学習から身に付けていることが確認できる。	1.授業スタイルを確立する。 ○「すずかけ学習スタイル」に沿って ・めあての共有 ・一人学び ・交流 ・ふり返り の学び方の流れを共通理解し、実践する。	・ふり返りの記述をもとに評価 ※めあてに沿った学びを具体的に書く。 ※自分の考えの変化を書く。 ※参考になった意見を書く。 ・多様なグループ、ペア・全体交流が授業に取り入れられ、交流を通した学びの深まりが見られる。 ・学力テストの「比較の思考」に関わる問題で、前年度のポイントを上回る。	・研究の方向性、年間計画、授業作り、ICTの活用方法などの確認(年度初めの校内研修) ・めあてや学び方の明示及びめあてを意識したふり返り ・課題設定の工夫、効果的な言語活動の重視 ・一人学びで自分の考えを持った上で交流 ・ペアトーク、グループトーク、全体交流を組み合わせた学びの分かち合いを授業に取り入れ、実践記録として残す。	◇めあてやふり返りを意識した授業スタイルが定着している。 ◇学校評価アンケート(児童)「自分の思いや考えを相手に伝えることができる」の項目において「よくできている・できている」の割合が全学年で増えた。ノートや発表、タブレットなど様々な手段を使うことができるようになってきていると考える。 ◇研究の重点としてICT活用を位置づけることで、学習活動でのICTの効果的な活用について検討したり、ICTの活用方法を共有したりすることができた。	A		
		算数 数学	○正答率全国平均を5ポイント上回った。算数の力は概ね定着している。 ○思考・判断・表現を問う問題で、正答率が100%であった。根拠となる数字を使って考えを説明する力が定着している。 ◆百分率で表された割合について理解しているかどうかをみる設問では正答率が4割程度であり、課題が残る結果である。抽象的な概念について、図や表などの具体的な資料を使って説明したり、日常生活に関連づけて考える学習活動を充実させることが課題と捉えている。(経年)	2.思考力・判断力・表現力を育成する。 ○研究推進による主体的な学びづくり ・年間を見通した学習計画・指導案づくり ・一人一授業の実施 ・実践事例の交流 ○基本的な学び方の定着 ・ノート指導(タブレット活用も含む) ○考える力の育成 ・学習内容を日常生活とつなげる ・授業の終末の工夫	・年間計画の作成と一人一授業の公開 ・事前・事後研修会を持ち、成果と課題を明確にし、教職員で共有できている。 ・ワークシートやノートに自らの考えや友達の考えなどを書き、学習の足あとを残すことができる。 ・図、表等具体的な資料を用いながら物事、数量の関係、表等具体的な資料を用いながら物事、数量の関係を捉え説明できている。 ・めあてに対してふり返りを書き、身についた学びを意識できている。 ・適切な思考力を使いこなして、課題を解決したり、考えを深めたりする。 ・学力テストの考えや解き方を記述で説明する問題で、前年度のポイントを上回る。	・段階に応じたノートの書き方の徹底指導(課題・式・図表・理由、ポイントの記入) ・自らの考え、思考過程、解法の理由・根拠の記入を指導 ・一人学び、図や表・ふり返りのかき方のモデル提示 ・タブレットを使ったプレゼンテーション活動(高学年) ・「相互交流場面の工夫・充実」に視点を置いた指導案の作成 ・児童自らが見通しを持ち、課題を深化させ、成果をふり返る授業づくりを進める ・事前研・事後研で「思考力の育成」の視点を置いた公開授業研修の充実 ・「教科書分析チーム」によって、中学校の教科書を分析し、思考力の系統を明らかにする。	◇年度初めに、年間指導計画の立て方研修を行い職員で共通理解を図った。また、研修で中学校の教科書の思考力について話を聞くなど、各教師が9年間の見通しを持って指導することの大切さを共通理解した。 ◇研究の中心に「思考力育成」を位置づけ、思考力の可視化を意識した授業改善を行うことで、子どもたちの思考力が高まっていると考えられる。 ◇学テ算数の「思考・判断・表現」において前年度のポイントを上回っていた。適切な思考力を使いこなして、課題を解決したり、考えを深めたりする経験がさらに積み重なったと考えられる。 ◇9つの思考力を掲示するなど、思考力の育成に視点を置くことで、児童が「『比較』をしたらいい」など、より意識を持って思考力を使っている場面が見られた。	A		
	定期テスト、単 元テストなどによる 状況(各教科)	○学期末のまとめテストにおいて、国語や算数の基礎学力がおおむね定着していると判断できる。	3.ICT機器の活用による主体的な学びづくりをすすめる。  ○一人一授業の中間での効果的な活用 ○実践事例の交流	・ICT機器を授業で活用し、実践交流会を持ち、成果と課題を明確にし、教職員で共有する。 ・学テ質問紙のICT活用に関する項目で前回ポイントを上回る。	・ICTを活用して児童の思考力を育てる実践事例を共有・活用(実践記録交流会)する。 ・「オクリンク」「ムーブノート」等を使った効果的な交流学習のあり方を開発・共有する。 ・実践例を研究紀要にまとめ、教職員間で共有する。	◇今年度も実践例を研究紀要にまとめ、教職員間で共有することができた。 ◇学校評価アンケート「学習でタブレットを使うことができる」の項目で「よくできている・できている」と97%の児童が答えている。子どもたちがタブレットを授業で活用することが定着してきたと考える。 ◇学テ質問紙「学習の中でPC・タブレットなどのICT機器を使うのは勉強の役に立つと思えますか」の項目で、「役に立つと思う」が78%(全国平均+10ポイント)であった。児童がタブレットを効果的に使っていると実感している。 ◆「オクリンク」「ムーブノート」等を使った効果的な交流学習のあり方を共有できた。今後は「オクリンクプラス」への移行に向けて事前研修や実践交流が必要である。	A			
	授業等からうかが える状況(各 教科)	○児童が自分の考えを持ち、話し合うことを大切に授業づくりを進めており、話し合いの場面で発言したり、考えをノート、ポートフォリオ等にまとめたりする学び方を学年に応じて学んできている。 ◆わかりやすく話すことのできる児童は多いが、発表について苦手意識を持つ児童もおり、発言する児童が固定化する傾向にある。	4.自主学習と読書活動を推進する。 ○家庭での自主学習の習慣の定着 ○学校司書・図書ボランティアや図書委員会と連携した推薦図書紹介活動の強化 ○電子図書館の利用	・児童が個に合った課題を設定し、家庭で主体的に自主学習に取り組む姿勢が定着している。(学校評価・児童による評価より) ・読書アンケート「読書が好きですか」の項目で肯定意見80%以上 ・電子図書館活用人数、冊数を増やす。	・低・中・高学年用の「自学の進め方」を配布し、学年に応じて自主学習への主体的な姿勢の定着に取り組む。 ・学習内容を日常生活や未来につなげることで、もっと知りたいという気持ちを刺激する。 ・実践交流会を行うなど、自主学習の職員研修を実施し、指導の充実を目指す。・学校司書と連携し、読書通帳や電子図書館の活用を推進する。 ・図書ボランティアと連携し、読み聞かせの機会を持つとともに、掲示物の工夫による本紹介を行う。 ・図書委員会による本の紹介を企画する。 ・毎月「家庭読書の日」は宿題を読書にし、家庭での読書時間を確保する。	◇タブレットを使用することで、自己の興味関心に応じた様々な自主学習が展開されるようになった。 ◇講師を招いての情報モラル学習会を、発達段階に応じた内容で3回(中学生対象・高学年対象・6年対象)実施した。家庭学習でタブレットを使用する際に、この学習が生かされると考えられる。 ◆子どもに対して学びポケットで宿題連絡を行っているが、保護者は閲覧できないため、保護者にも配信していく必要がある。 ◇学校司書、図書ボランティア、図書委員会と連携した読書活動の推進を行うことができた。 ◇毎月の「家庭読書の日」、毎週金曜日の朝に読書タイムを入れることで、読書に親しむことができ、休み時間などの自発的な読書につながった。 ◇読書100冊表彰、10000ページ表彰を学期毎に行い、読書への意欲づけができた。 ◆高学年になるにつれ、図書室離れ、本離れが進んでいる。本を対話のきっかけにしたり、コミュニケーションツールにしたりして、読書活動の活性化につなげたい。 ◆教科書学習と読書活動の連携をより活発に進めていきたい。	B			
学力向上 習に 係 る 学 習 習 慣 ・ 生 活	全国学力・学習 状況調査の質 問の状況	○朝食、就寝、起床時刻など、学力を支える生活習慣に関する項目については、概ね良好な結果であった。 ○家庭での学習時間が30分以上の児童が83.3%と、全国平均と同程度であり、家庭での学習習慣の定着については、概ね良好な結果であった。 ○ICT機器活用は「毎日使う」の回答が53.3%と全国平均を25.1ポイント上回っている。また「ICT活用は勉強に役立つ」の回答は78.3%と全国平均を約10ポイント上回っている。ICTの効果を実感している。しかし、タブレットの使い方、使い過ぎに関する課題について、今後取り組む必要がある。 ◆平日一日当たりの読書の時間が10分未満の児童が61.7%と全国平均より約20ポイント下回っている。読書の時間を確保したい。また、読書通帳・電子図書館など、現在取り組んでいる活動をさらに進めたい。	5.個別指導の充実を図る。 ○朝学習・補充学習の充実と、つまずきが見られる児童への個別指導の推進 ○基礎的な内容について日常的な指導の工夫	・「がんばりタイム」による個別指導の充実 ・個々の課題に応じたプリントやタブレット学習の反復による漢字・計算で9割以上の定着を達成 ・ドリルパークを活用し、個々の課題に応じた計算や漢字学習を推進 ※ドリルパークによる学習履歴の見取り方の研究・開発 ・復習項目(ポイントやキーワード)を使ったまとめ等、復習の仕方、復習ノートの作成の仕方を指導する。 ・兵庫型学習を推進し、学年会を通して、一人一人の学習の課題を見取り、共有する。	◇「がんばりタイム」を通して、基礎学力の定着、学習意欲の向上につながられた。 ◇個々の「困り感」に応じたアプリやプリントを活用することで、学習意欲の向上につながることができた。 ◇ドリルパークを活用し、算数科の新単元に入る前にレディネスチェックを行い、ドリル問題に取り組むことで、児童の実態把握が容易となり、つまずきに対して個にあった支援をすることができた。 ◆子ども自身が自分の習熟度に応じて課題を選択できる学習設定や自らの課題を家庭学習につなげていく場設定を充実させる必要がある。 ◆「困り感」チェックシートを活用することで、児童一人一人の「困り感」を丁寧に見取ることができるようになっていく。	B				
校内 研 究 ・ 研 修 の 状 況	校内研究の状況	○「可視化・操作化・構造化」を手立てとして思考力を育成する単元づくり、学習づくりを推進する。 ○「教科書分析」「朝学習」「個別・環境作り」のチーム会に分かれ、全ての教師が研究に関わる体制を組織する。 ○公開授業については、実践の価値を記録し、教職員全体に広げる。	6.学校園所の連携を通して学びの円滑な接続を目指す。	・中学校区共通の「目指す子ども像」の実現に向けたカリキュラムに沿って教育活動が進められている。 ・中学校の学習内容を踏まえ、9年間の学びを見通した実践を進めている。	・年間を通じた学校園所交流の継続的・計画的な実施 ・けやき台中校区で「めざす子ども像」に向けたカリキュラムを作成 ・中学校教科書から思考力に関する単元を取り上げ、研究に位置づける。	◇学校園所連携では、全体会・分科会での意見交流を年3回実施した。また、授業見学を実施し、各学校園所の課題等を共有することができた。 ◇けやき台中校区で学力向上部会を設け、学力テストの分析結果を交流し、中学校区の成果と課題を共有した。 ◇中学校教科書から思考力に関わる単元を取り上げ、9年間を見通した取り組みにつなげることができた。 ◆幼小中の校種間で授業を参観し合う機会をさらに増やしていきたい。	B			
	校内研修の状況	○4月の校内研修で、研究の方向性や見通しを教師間で共有している。「思考力の育成」「ICT活用」「小中連携」をキーワードに授業研究を進める。 ○思考力の育成に軸を置いた実践記録を研究紀要にまとめたり交流したりすることで、実践をするうえでの大切なポイントを次年度につなぐ。	7.家庭や地域と連携し、学びを深める機会や学びの場を増やす。	・年2回の児童・保護者アンケートから、地域連携に関する項目の肯定的意見が80%以上。 ・地域支援ボランティアとの連携が計画的に進み、学校の中で地域の方が活躍し、児童の学びの充実が見られる。	・学校運営協議会を母体とし、児童の興味に合わせた学びの場の提供を進める。 ・地域コーディネーターと校内地域連携担当を中心に、学校支援ボランティアと連携した授業を工夫、推進する。	◇学校運営協議会委員の方々に授業を参観していただき、児童の実態に応じたアイデアを出してもらうことで、学習の場設定をひろげていくことができた。 ◇学校支援ボランティアとの連携し、器楽・ミニなど支援をいただいた。また、「ありがとう集会」を開催し、全校児童がボランティアさんに感謝の気持ちを伝えることができた。	A			
家庭・ 校 種 間 連 携	家庭・地域等の 状況	◆家庭では宿題をしているが、読書、自主学習を行う児童の割合が少ない。(経年) ◆「地域の行事に参加している」の回答が50%と、前年度の47%から少し上昇した。地域行事が再開されつつある現状で、今後の経過を注意深く守る必要がある。また、保護者や教師が地域行事に参加する意義を子どもたちに伝える必要がある。								
	小・中における 教科連携等の 状況	○オープンスクールの参観、生徒指導連絡会、学校園所連携会議などを通して、教科学習の円滑な接続を目指している。 ◆中学校区で共有した「めざす子ども像」をもとに、小中を見通したカリキュラムを作成する必要がある。								